

図書館だより

Library News No.57

Nara National College of Technology

2003年 2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



31 市川 まどかさん

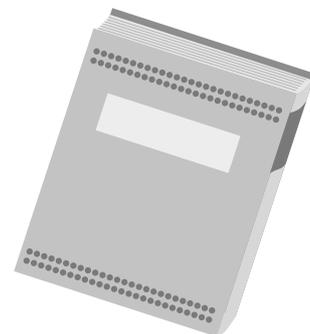
目 次

巻頭言「夢」.....	2	入賞作品紹介	6
特別寄稿「図書の執筆について」.....	3	新刊書棚から	15
読書感想文コンクールを終えて	4	特許について	16

奈良高専が開校したのと同じ昭和39年に3つのCおよび3つのS (cheap, comfortable, carefully, safety, speedy, surely) という理想を夢に開発された東海道新幹線「夢の超特急」が走り出しました。初めて超特急ひかりに乗車したときはまさに夢のような気分で、「ただいま時速200 kmで走行中です。」という車内放送が誇らしげに流れていたのが思い出されます。現在では500系、700系となり、当初の期待を持って待ち望まれた夢ではなく、日常的な交通手段である現実として存在しています。もはや新幹線は夢ではなく、さらに3つのCと3つのSをより理想に近づけようという夢の基に進化を続けています。あるいは逆によりのんびりとして、旅情をかき立てるものへと人々の夢は変わってきています。人々は常にいろいろな希望と夢を抱いてきました。未来の夢、将来への夢、理想に近づくための夢、よりよいものを求める夢。人々は沸々と湧き出してくる夢を実現するために絶え間なく努力し、研鑽を重ね、ありとあらゆることを試みてきました。「夢が全てを動かしている。」といっても過言ではないでしょう。いまでも、皆さんや我々もいろいろな夢を抱き、実現に向け懸命に前進しています。

夢を実現するにはどのようにすればよいのか。そのような方法が簡単に見つかるはずはないでしょうし、人々はそれをずっと模索し続けてきました。しかし、いろいろな種類の夢と多くのヒントが隠れている場所が身近な所にあります。それが図書館ではないでしょうか。それぞれの本にはいろいろな夢が込められています。小説に込められた夢、詩集の中の夢、専門書に込められた夢、美術書の中の夢、あるいはCDなどの音楽や映画、映像の中に込められた夢……。人生への夢、理想への夢、未来への夢、あるいは未知なる過去への夢。それらの夢のために人々は何を考え、どのようなことをしてきたのか。これらのものが図書館の中に潜んでいます。「すべて良き書物を読むことは、過去の最も優れた人々と会話をかわすようなものである。」とデカルトの言葉にあるように、書物を通じて優れた先人と会話し、その中に込められた先人の夢を読みとり、先人と一緒に夢の実現を考えてみてはどうでしょうか。自分の夢の実現に一步近づくかもしれませんし、また新たな夢が見つかるかもしれません。

たまには書物を通じて、それこそ夢のような人々と心ゆくまで夢の話をするのも楽しいことではないでしょうか。



図書の執筆について

電気工学科 高橋 晴雄

昭和42（1967）年4月に奈良高専に奉職して以来36年が過ぎるが、縦書の本（小説、随筆）はあまり読んでいなくて、読んだのは横書の本（専門書、英文関係）が殆どである。奉職した頃は、電子回路と電子工学の授業を担当し、講義用のノート作りのために大学と高専用の教科書を集め、書き方や表現の仕方を調べて自作のテキストを作り上げた。手にしたのは専ら横書きの本である。

研究に関して読むのは横書の和文や英文の論文で、書くのは学会発表の予稿や論文の執筆でやはり横書であった。初めて自分の論文が学会誌に掲載されるまで7年掛かった。いくら投稿しても、高専を見下げた査読者のコメントで採択されなかった。それならと、米国学会に英文論文で挑戦した。アイデアはよいが英文がまずい、のコメントで査読者が書き直してくれてようやく採択された。以後、国内の学会でも簡単に採択されるようになった。「たかが高専されど高専」と認識を改め、実力を認めてくれたのだろう。

15年ほど前から、工業英検の試験会場の世話をするようになって、工業英語教育の充実の必要性を痛感し、工業英語のテキスト作りを試みるようになった。そのため英文図書や過去の試験問題を読むが、やはり横書きである。とにかく目に触れるものは、殆どが横書きで、書くのも横書である。横書きの本には、情緒などさらさらないが、わかり易く読みやすい表現の仕方を見つけたときには大きな喜びがある。時には新しい発見や感動もある。理にかなった正しい理論の組立で、人生の教訓や示唆を与えられたこともたびたびだ。やがて講義は自分の書いた教科書でしょう、人の書いたものを読む側よりは、自分の書いたものを人に読ませる側になろう、自分の作品を残そうと、考えるようになり図書の執筆に挑戦した。幸いにも、電気関係の教科書や専門図書を9冊（共著）と工業英語関係の図書7冊（単著）を出版させて頂いた。現役最後の著作は、「工業技術英単語集」（森北出版）である。

15年位前から工業英語教育の教材開発に挑戦し、本科の工業外国語、専攻科の技術英語・実用技術英語で自主編集したテキストならびに工業英検の過去の試験問題、これまでに拾い出した物理、数学、機械、電気、情報、化学関係の専門用語や動詞、述語、形容詞ならびに副詞の英単語や熟語約8,700語を英和としてまとめ、さらに、工業英作文や英文論文の作成のために、約8,600語を和英としてまとめた。まとめるのとチェックに2年間かかった。こうして工業英語教育の重要性を痛感した時から15年の歳月をかけ、ようやく、平成14年の11月に上梓することができたのである。

図書の執筆では、「印税が入り良いですな」の声をよく耳にするが、印税は、専門図書で本体価格の10%である。共著の場合は執筆ページ数での配分である。私の場合は打ち合わせで集まっては飲み、その上飲みながらの作業で、印税収入は貰う前に酒代として既に消えている。高専用の教科書は、発行部数が少なく、かかる作業時間の長さや気苦勞等を考えると割の合わない仕事ではある。

しかし、書いた実績で講演などを依頼されたり、作品を残したという達成感、充足感は大きい。誰にでも勧められるわけではないが、人の書いた本を読むばかりでなく、ゆくゆくは自分の作品を残すことにも挑戦して頂きたいと願う。

平成14年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

第27回読書感想文コンクールの審査結果を発表します。応募総数は369編。その中から、図書館委員会と国語科教官による審査の結果、次の最優秀作1編と優秀作9編が入選となりました。以下にその氏名を記し、栄誉をたたえたいと思います。

最優秀賞

情報工学科1年 福井 梨恵 『ビリー・ジョーの大地』を読んで

優秀賞

機械工学科1年 仲井 智彦 『老人と海』を読んで
電気工学科1年 後藤 弘毅 『坊ちゃん』を読んで
情報工学科1年 衛藤 聖 『ちいさなちいさな王様』を読んで
物質化学工学科1年 山田 真由美 夜明けのうた
機械工学科2年 永井 玲央 人間が地雷をすてる日
電気工学科2年 小林 正善 サンチャゴの強さ
電気工学科2年 田中 健太郎 『英霊の声～奈良県戦没者遺稿集～』を読んで
情報工学科2年 野村 明日香 自分らしく、まっすぐ生きよう
物質化学工学科2年 丸田 寛子 『ビリー・ジョーの大地』を読んで

また、惜しくも入選とはなりませんでしたが、審査の過程で高い評価を得て、最終選考まで残った作品もありました。それらを本年度より佳作として表彰することになりました。以下に名前を掲げた学生の作品です。

佳作

1 M 門脇征四郎	1 M 川部 桂介	1 M 竹原 尚吾	1 E 木谷 宏己
1 E 諏訪 尊信	1 S 吉井佑太郎	1 S 佐藤 峻	1 S 治部 皓之
1 S 東久保弘美	1 I 土本 良樹	1 I 佐藤 直樹	1 I 山本 優美
1 C 大西 諒	1 C 越田 高史	1 C 小玉 瑞穂	1 C 藤原 真梨
2 M 奥村 匡史	2 M 坂本 貴彰	2 M 吉川 清孝	2 E 國弘 幸佑
2 E 田中 聡	2 S 梅原 茂樹	2 S 林 公造	2 S 松本 雅人
2 I 衛籐 聡美	2 I 梶本 裕介	2 I 千代 真広	2 C 加藤 睦美
2 C 杉本 太一	2 C 高木 謙	2 C 田中 夏子	2 C 西村 和哉
2 C 松本 和訓	3 M 森田賢太郎	3 M 森口 遼太	4 C 辰巳 哲馬

その他にも多数の力作があり、応募された学生の皆さんに、この場を借りて感謝の意を表します。以下、恒例に従い、入選作について、審査に関わった一人として、簡単に論評しておきます。

最優秀賞の福井梨恵さんの作品。この本を読むきっかけからあらずじ、そして自分の経験に引き寄せての感想と、見事にまとめられています。審査に関わった全ての教官からまんべんなく票を獲得し、選ばれました。1年生らしい素直な文体で、また来年が楽しみです。

優秀賞の仲井智彦さん、名作「老人と海」を読んでの感想です。主人公の老人サンチャゴの気持ちをよく考えています。後藤弘毅さんは「坊ちゃん」について、人間には損得ではなく、もっと大事なものがあるという視点から書いています。衛藤聖さんの作品も、大人になるにつれ、失ってしまいがちなものについて述べています。高専のように技術・科学を勉強する学校でこそ、皆さんに持ち続けてほしいものがあります。勉強だけでなく、たまには本も読んで、大事なものを見失わないようにしてほしいと思います。

山田真由美さんは女性差別をテーマとする本に取り組みました。主人公の気持ちなど書ききれていない面もありますが、自分自身の「おかしい」という素朴な疑問を精一杯ぶつけています。2年生の永井玲央さんは、地雷について。この手の本の感想文ではどうしても本の内容の紹介が多くなってしまいましたが、それをわかりやすくまとめています。田中健太郎さんもノンフィクションの本です。教官の立場として、太平洋戦争の体験は親から聞いて知っていても、皆さんの世代にどう伝えてよいかいつも迷っています。このような本を学生の皆さんが読んでくれることで、何かを感じ取ってくれば幸いです。

次は小説に戻りますが、小林正善さんも「老人と海」について。タイトルを「サンチャゴの強さ」と付けてくれたところがまず気に入りました。他にも「老人と海」を取り上げた作品がありましたが、タイトルの通りテーマを絞り、また祖父や自分に引き寄せて考えているところがよかったです。野村明日香さんも、タイトルを自分で考えて付けているのが印象に残りました。十七歳の若々しい感性で書かれた作品です。丸田寛子さんの作品は、最優秀賞と同じ本を読み、曾野綾子さんのエピソードから始め、「豊かさ」について述べています。視野としては最優秀賞の作品より広いものを持っていたといえます。

最後に、全体の読書傾向について述べておきますと、今年は「ハリー・ポッター」シリーズが多かったのですが、それ以外では、名作といわれる、いわゆる文学作品よりも、ノンフィクションやドキュメンタリーが多くありました。「高専らしい」という点では好ましい傾向ともいえます。できれば感想文に関係なく、文学とそれ以外の本と、バランスよく読むことを希望します。それから、読書感想文の書き方のポイントとしては、内容の的を得た紹介（残念ながら国語力が必要かも）はもちろんですが、自分の考え、特に自分自身の体験や身の回りに引きつけて考えたことが書かれていると「個性」が感じられてよいものです。感想文が書けなくて困った方は参考にして下さい。

(国語科：鍵本)



受賞された皆さん（校長室にて）

入賞作品紹介

カレン・ヘス 著

『ビリー・ジョーの大地』 を読んで 11 福井 梨恵

「生きることは、こんなにもつらいけれども、
こんなにもいとおしい」……。

私は、先生から配られたプリントのこの言葉を一目見て、この本に強く惹かれました。そして早速、図書館で借りて読み始めました。そして、読み終わるまでに色々な事について考えさせられていました。それは、私のこれまでの人生と共感できる場所があったからかもしれません。

この物語の背景は1930年、大恐慌の時代。アメリカ、オクラホマ州のパンハンドル地方の人々は、貧しくもたくましく生きていました。そして、主人公のビリー・ジョー・ケルビーも両親と共にその地に暮らす一人でした。土埃のやむことのない日常。塵肺症で死んでいく多くの人々、肺に泥が詰まり死んでいく家畜、土嵐やイナゴの大発生被害で育たない小麦や花々。そんな中でも、かあさんに赤ちゃんができ、大好きなピアノが思い切り弾けて、ささやかだけれど幸せな生活を送っていたビリー・ジョーに、不幸が降り懸かります。とうさんが調理用ストーブの横に、バケツに入った灯油を置いていた為、そのバケツに不注意で火がついて燃え上がり、かあさんに燃え移ってしまったのです。火だるまになったかあさんは、それを何とか助けようとしたビリー・ジョーと共に大ヤケドを負ってしまったのです。

その事故のせいで、ビリー・ジョーの人生は大きく変わってしまいました。かあさんと生まれるはずだった弟、そして自由にピアノを弾ける手までも、一度に失ったのです。父を恨み、土埃を恨んで、ここから抜け出したいという思いが徐々に強くなったビリー・ジョーは、とう

とう貨物列車に乗り込んで逃げ出します。しかし、その列車の旅で出会った男に今までの事を話すうちに、これまでが如何に幸せだったのか、そして、自分の居場所はとうさんと土埃のある、パンハンドル地方のあの家だけなのだと気付くのです。

私はこれまで、色々な辛い思いをしてきました。いじめで、クラスの皆から無視されたり、ついさっきまで一緒に遊んでいた友達に裏切られたり、本当に苦しい思いをしてきました。一時期は、本当に苦しくて、ここから逃げ出したい、死んでしまってもいいと考えていたこともありました。でも今は、そんなこと少しも考えていません。何故ならいじめの酷かった小学校を卒業して、中学校でできた友達や、奈良高专で出逢った優しい友人たちと触れ合ううちに『生きていたら必ず良い事はあるんだ。私を分かってくれない人が居れば、分かってくれる人も居る。それでいいんだ。』と思えるようになってきたからです。ビリー・ジョーは土埃のせいで人生がめちゃくちゃなのだと逃げ出したけれど、『土埃も自分の一部なんだ。土埃があって自分が居るんだ。』と考えることで前向きになることができました。私も『自分は自分』だと考えることで、人生がやっと良い方向に進んできていると思います。この本を読んで改めて、それが一番大事なのだと考えさせられました。

『ビリー・ジョーの大地』は14歳の少女の思いを日記のように、また詩のように、真っ直ぐに書いた小説で、文面は簡単で読みやすいけれども、人生についてもう一度考えさせてくれるような、そんな不思議な本でした。私はまた、このような本にめぐり逢うことを祈りつつ、これからも読書が続けていきたいと思っています。



ヘミングウェイ 著

『老人と海』を読んで

1 M 仲井 智彦

以前に見たアニメ『老人と海』は、内容が三十分しか無かったので、登場人物の心情がよく味わえなかった。しかし、原作では、それが十二分に表されており、期待以上に楽しむことができた。

キューバの老漁師、サンチャゴは八十四日にもおよぶ不漁に苦勞している。始めのうちは、昔なじみの少年がついていた。しかし、あまりにも不漁の日が続いたので、少年は老人の舟から去っていった。別に二人は仲が悪いわけではない。少年の父親の「思いちがい」が原因だった。永遠の別れというわけではないが、漁で何の手伝いもできず、老人が毎日からの舟で帰ってくるのを見ることが、少年には何よりも辛いことなのだ。

不漁八十五日目、今日こそはと思いつつ、老人は「いつものように」漁に出る。すると、今までの不漁をえさにしたかのように、老人が仕掛けたわなにとてつもなく大きな魚が引っかかる。老人は引き上げようとするがびくともせず、魚はどんどん遠ざかって行く。老人は決して腕が悪いわけではない。それはおろした綱を垂直に保ったり、魚と闘いながら食料用の鰹（しいら）などをたやすく釣り上げてしまうことからわかる。だが、そんな老人を手駒にするほど魚は頭が良く、そして「強い」のである。

老人は少年が去って以来、ひとりごとを言うようになった。今回も「あの子がいたらなあ」を連発している。もちろん手伝ってもらいたいという気持ちもあるが、一人でいるのがさびしいのである。魚も老人から逃れようと、暗闇に深く潜り、一匹だけになってしまう。老人と魚はずっと同じような状態で闘い続けた。そして、出会ってから二日たった時、近づいてきたところを銜で一突きし、老人は見事に魚、正体はカジキマグロだったが、をしとめる。だが、老人は運に見離される。帰路、何匹もの鯨に襲われてしまうのである。

その夜、老人は帰ってきた。あの魚は頭と尻尾、そして背骨だけになってしまっていた。老人は小屋に入り、眠りこんでしまう。朝になり、少年が老人の小屋へやって来た。だが、眠る老人の両手を見て、思わず涙を流してしまう。

僕も読み終えた後に感極まってしまったが、なぜサンチャゴはこのカジキマグロにこだわり続けたのだろう。普通二日間も闘い続ければ、誰だってあきらめられるはずである。魚の正体を知りたかったからか。それとも、自分との共通点を持っていたからか。おそらくあらゆる理由が彼を動かしていたのであろうが、その最たるものは少年のせいであろう。彼は出港前に、「おれは一風変わった年寄りなのさ」と少年に言っている。彼はそのことを少年に証明したかったのではないか。そして、それは少年に戻って来てもらいたいという気持ちの表れではないだろうか。

だが、彼には全く運がない。八十四日間もの不漁に加え、魚を殺すために手や背中に傷を負い、大事な釣り道具も全て失う。あげく魚は鯨に食いつくされてしまい、完璧に打ちのめされてしまう。しかし、それでも気楽なものだな、と彼は思っている。なぜなら彼は海のことを「大きな恵みをときには与え、ときにはお預けにするなものか」と考えているからである。結果が良かろうと悪かろうとそれはそれでしかたのないことなのである。

サンチャゴは海を愛する漁師だからこそ、そんな考えができるのだと思う。そして、それはあらゆる職業にも当てはまるのではないだろうか。海のような仕事を敵と考えず、少年のような好きな仲間と一緒に楽しく仕事をすればいい。そんな考えが頭に浮かぶ。



夏目漱石 著

『坊っちゃん』を読んで

1 E 後藤 弘毅

中学校の国語の教科書で、この「坊っちゃん」の初めの部分を少しだけ読んだ。主人公の性格が気に入ったので本を買ってきて最後まで読むことにした。だからこうして読書感想文を書いている。

この物語では、主人公の性格がとても印象的だ。正直で卑怯なことが嫌いで無鉄砲ですぐに物事を決めすぐに行動する、損しやすい人物である。これは親譲りだそうだ。そのわりには彼の兄は性格がまるでちがう。卑怯なこともする。頭がよくなく将来の計画もない弟とちがって、実業家になるために英語の勉強もしていたそうだ。おまけに色の白い女のような人物である。ここまで性格が極端にちがう兄弟も珍しいが、ともかくこれはそんな弟が数学の教師として田舎の学校へ赴任するという話である。赴任した先の学校の教頭と、教頭についてまわる教師の人柄や言動に怒り、同じく二人に不満をもつ数学の主任とともに対立していくというのがおおまかな流れである。わざとそれとわかるように本人の悪口を言ったり、人が変わったことをすると大勢で笑い合ったりと、学校生活でよく見かける光景が所々に描かれている。この時代の人たちと近頃の小中学生はけっこう卑屈かもしれない。もっとも、ただ知らないだけで昔から日本人は全般に卑屈なのかもしれないが。

主人公の家には清という老婆が仕えていたが、この老婆はいつも主人公のことを気にかけ、いろいろなものを買ってあげたりと、主人公にとっては母親よりも母親らしい存在で、彼が田舎へ行く日には見送りにも来たほどである。父親からも町の人からも好かれていない主人公の数少ない味方であり、赴任した先でも手紙を出したり貰ったり、夢の中に現れたこともあった。最も信頼できる味方なのである。

先ほど書いた「数少ない味方」というのには数学の主任も含まれており、主人公からは「山嵐」と呼ばれている。わりと礼儀正しくて人情

深く、生徒からの人望が最も厚い。彼は後に主人公と二人で教頭と腰巾着をこらしめ、学校を去る。こらしめるとはいつても、自分の気が済むように相手を撲っただけである。撲るしか方法がなかったのである。いくら口で言ってもべらべらとまくしたてて誤魔化してしまうのだ。日本の政治家にもよくいそうなタイプだ。口で言ってもきかないから、「力」に頼るしかない。いいことではないが、どうしようもない。本人が反省しなければまた繰り返すのは分かっているのだが、どうやっても反省させられない。これも学校生活や日常でよく見かける光景だ。やっていいか悪いかなどとは考えもしないんだろう。でなければニュースをもっと気楽に聞いていられるはずだ。悪事には必ずしも報いがあるというわけではないから、よほどのことでない限りは何をしたって平気なんだろう。

この物語は善人と悪人がわかりやすいほど対照的であるのだが、善人が得をするような場面がない。主人公も出世したわけではない。田舎へ行って生徒に馬鹿にされたり、恥をかいたり、いらぬ怪我をしたばかりだ。しかし本人は損だとは考えていないようだ。それは本人が得か損かでなく正しいか正しくないかで物事を考えるからだろう。これはきっと大切なことなのだろうが、残念なことに人は得がないと生きてはいけない。正しいことをしても得がないと普通に生活することもままならない。そんなわけで、つつい物事を損か得かで考えてしまうのだ。僕もそうだ。この主人公を見習うべきなのだろうが、並み大抵のことではない。一生かかっても無理かもしれない。しかし、一応努力はしてみようと思う。



アクセル・ハッケ 著

『ちいさなちいさな王様』 を読んで

1 I 衛藤 聖

「きっと、小さな王様が欠けていてさびしい
思いをしている人が、世の中には、本当はもっ
とたくさんいるんだよ。ただ、そのことに気が
ついていないだけで。」

星空を見上げながら、主人公の「僕」がこう
言ったとき、何だか私は不思議なさびしさを感じ
たような気がしました。私にはもちろん王様
は見えないけれど、それでも、この本の中のち
っぽけなくせに態度だけはでかい王様の存在感
は、私の心に少なからず何か影響を与えてくれ
たようで、実はこうしている今も、あのひとさ
し指サイズの王様が、本棚の裏からひょっこり
出てきそうな気がしてなりません。もっとも、
私は小心者なので、本当に出てこられたら驚き
のあまり、カチンコチンに固まってしまうかも
しれません。

主人公「僕」の部屋にある日やって来た王様、
彼はひとさし指くらいの大きさしかありません。
けれど、新聞の上でふんぞり返ったり、自分よ
りはるかに大きい「僕」に命令するなど、中身
は「大人サイズの王様」と同じなのです。あ、
でもこの言い方は少々不適切かもしれません。
なぜなら王様の中身は「大人」というよりは、
「小さな子ども」に近いものがあるからです。王
様の種族は、生まれたばかりの頃は体も大きく、
いろんなことを知っています。しかし、成長し
ていくにつれ、そのサイズはだんだんと小さく
なってゆき、少しずついろんなことを忘れてい
くのです。小さくなっていく王様、けれど反対
に夢や想像力は、体が縮むのとは逆にどんどん
膨れ上がっていきます。そう、王様達には「子
ども」である時期こそが人生の最期にあたる
というわけです。私から見れば、成長すればする
程、何かを失っていくようでさびしいな、と思
うのですが、王様の方は逆に、体が大きくなる
かわりに可能性が小さくなっていくのだから気
の毒だ、と私達に言います。知識ばかりが膨

れ上がって、想像の世界が小さくなっていくの
だ、と。確かに、そっちの方がさびしい事であ
るのかもしれませんが。

一度、「僕」と王様が外を散歩したことがあり
ました。「僕」にとっては、毎日仕事に行くたび
に通るつまらない道なのですが、王様と一緒にだ
ったその日は、普段は気づかなかった様々なも
のに出会います。それは、普通だったらありえ
ない、つまり空想の産物なのですが、「僕」はな
んだか新鮮な気持ちになります。これが、つま
り、「僕」に欠けていた、想像の世界というもの
なのかもしれません。つまらない物も楽しい事
に変えてしまえる力のようなものなのだと思います。
そういえば、私が小学生の頃、片道四十
分の退屈な通学の道のりを楽しく変えてくれた
のは、あのころは大きな毛虫のように見立てて
いた草原や、恐竜の卵のような岩や、海のような
田んぼの稲だったように思います。小さい頃、
輝いて見えていた世界が、もしつまらなくなっ
てきたのだとしたら、それは、つまらなくなっ
たのは、世界ではなく自分の方なのだと、指摘
されたような気分でした。

物語の中で、「僕」は王様のことを「僕の王様」
と表現しています。王様は自分では、「現実では
おれのような王様の類は存在しない」などと言
っていたけれど、私は、現実にも一人一人、「自
分の王様」がいるような気がしています。「僕」
がとっくの昔に忘れていた想像の世界を教えて
くれた、あのちっぽけな王様が。「僕」は、「王
様が欠けている人」という言い方をしていたけ
れど、それはただ、王様に会う方法を思い出せ
ずにいるだけなのだと思うのです。だって例え
ば、いつもは何気なく見ている空のその青さに
気づいて息をのんだりするとき、見えないけれ
ど、きっと肩の上とかに、あの気まぐれな王様
が座って、一緒に空を見上げているに違いない
から——。



ミンフォン・ホー 著

夜明けのうた

1 C 山田 真由美

小学校と中学校で人権学習として、部落差別・男女差別などを学びました。この話は三十年前のタイの一農村のできごとです。私はこの本と人権学習をした事で、今の日本でもまだまだ差別があり、この少女のように差別に対して、前向きにむかっていかなければならないと再度認識させられました。

少女タウンは村の農家に住んでおり、弟のクウェーと同じ学校・学年で勉強しています。それも女が勉強するには大変な時代だったので、頼みぬいて学校へ行かせてもらっていました。私達は現在、日本の制度として作られた社会で教育を受けるなど、何不自由なく九年間は勉強することができ、生活に支障のない読み書きは、皆ができるようになります。タウンたち農村の子供たちは、自ら学びたいと思っても容易ではないのです。都会の学校でよりよい勉強を続けるための奨学金を得るにも、テストの結果で決まります。姉が一番弟が二番という立派な成績を残しても、一人しか選ばれず、姉に決定しました。しかし、姉は女。この時代は大変な男女差別があったのです。家族である父からも反対されるし、彼女自身でも「女の子だから何もできないのだ・・・。」という先入観があるのです。女性だから勉強する必要はないということはおかしいです。勉強して貧しい村人の生活を改善し、不公平のない社会を創る夢をもっています。タウンは女でも都会で勉強したい為に、都会で生活したことのある従兄夫婦に助言を求めに行きましたが、この夫婦は都会生活から挫折して、帰郷したことを聞かされ、また村のみんなに尊敬されている僧侶も仏の教えを説くだけで何の解決にもなりませんでした。この時点で私は、タウンの信念、訴えはここで終わり、クウェーに譲ってしまうのではないかと思いました。弟に譲れば何の支障もなく皆から激励されて出発できるのに女が勉強しても何もならないと思われるのが悔しいです。でも、周りの人もタウンの一生懸命の気持ちが通じ、共に悩むこと

で考えが変わっていき、新しい気持ちで見送ることができました。弟も言葉には出さなくても、姉の作った夜明けのうたを歌って、出発を心から祝うのがよく分かりました。

五、六年前私の親戚の伯父がタイに出張で、半年程滞在していました。首都はまだいいのですが、地方はまだまだ発展していなかったそうです。学校教育はもちろん、あらゆる方面でかなり開きがあると聞きました。首都が政治・経済・文化の中心として発展を続けているその裏には、タウンの村のように生活するのに精一杯の人が多そうです。経済が発展しても、多数の人々の生活が向上し、平等な社会がつくられているのか、まだまだ疑問が残ります。今、日本では、差別はまだ残っているものの、改善されつつあり、社会・教育についてもかなり進んでおり、住みやすい国になっていますが、昔はこのタイのようにひどい差別、不公平などが一杯あったと聞いています。今では、日本を引っ張っている国会議員も、女性がかなり増え、男女差別もない時代になっていますが、経済が発展しても色々な形で差別があり、私達一人一人がその事を気付く目、心を持って差別のない社会を築いていかなければならないと思います。この本の題名にもなっている、「夜明けのうた」の歌詞は、タウンの心情そのもののように感じました。

柳瀬房子 著

人間が地雷をすてる日

2 M 永井 玲央

現在世界中には、約1億2千万個の地雷が埋設され、その多くが対人地雷といわれています。地雷には「対戦車地雷」と「対人地雷」があります。「対戦車地雷」はその名の通り戦車を破壊する為、大型で130キロ以上の重量をかけなければ爆発しない仕組みになっています。人が踏んでも爆発しないので比較的安全です。しかし、130キロ以上の重量をかけなければ爆発しない地雷でも、やはり恐怖感があります。もし、広い公園に「対戦車地雷」が1個だけ埋められていて「絶対安全だからここで遊ぼうよ」と言われても僕は遊ばな

いと思います。

一方、もう1つの地雷「対人地雷」は人を傷つけたり殺傷することを目的とした小型の地雷です。5キログラムのわずかな重量で爆発する仕組みになっています。5キログラムと言えば、だいたい小型犬の重さです。わずかな重量でも爆発する地雷が世界にたくさんあると思うと本当に恐ろしいです。

対人地雷に触れると2人に1人は死に、それは女性、子供を問いません。人を区別しないので、全然罪もない人々が地雷の被害に遭います。本に掲載されている地雷爆発による被害者の写真はどれも目を背けたくなるほど残酷でした。対人地雷の被害に苦しむ人たちは世界に約25万人で、毎日世界中で70人が被害を受けていると書かれていました。この被害をなくすにはどうすればいいのだろうか？ほとんどの人が地雷を取り除けばいいと答えると思います。実際僕もそう思っていました。でも、なかなかそう上手くはいかないみたいです。対人地雷問題の解決を難しくしている現実の「ギャップ」があるからです。1つ目は「埋める数と取り除く数のギャップ」。世界で取り除かれている数は年に10万個、埋められたのは200万個です。この部分を見たときびっくりしました。「2つ目は作る費用と、なくす費用のギャップ」。対人地雷は、だいたい3ドルから10ドルで作れるのに、手作業が中心の除去作業にかかる費用は1個あたり約100ドルから、場所によっては1千ドルと言われていて、被害を受けた人の治療費やリハビリにかかわる費用、橋や道路など壊れた場所を修理するのにもたくさんのお金がかかるそうです。3つ目は「技術のギャップ」。新たなタイプの地雷を作る技術はどんどん進んでいるのに、取り除く技術はほとんど進歩していません。昔ながらの手作業が中心なので費用と時間、そして危険を伴います。こうした理由が地雷を撤去できない原因なのです。地雷の撤去作業の写真を見て、どれ程大変で危険かが伝わってきました。人が作業していたら時間もかかるし危険なので何か良い方法ないかと考えてみました。ものすごく大きいダンプカーで地雷源を平にする様に地雷を踏

んで行けば、時間も短縮できて地雷をなくす事ができるのでは？と思いました。でもそれは、なかなかできないみたいです。大型の機械では、地雷原まで持ち込むのがたいへんだからです。アクション映画でよく銃や地雷を使う場面があってカッコイイと思っています。でも現実にはこういった兵器が被害をもたらしているのに対しては良くないと思いました。

地雷は大人も子供も区別無く、兵士も戦争に関係なく、朝も夜も人の命を狙っていて、実際の戦争が終わり、平和がやってきても突然、人を不幸のどん底に落とし込むと書かれていました。本当にそうだと思います。世界にはたくさん問題があり、この地雷問題もそのうちの1つです。この問題をどういう風にして解決するのが21世紀の課題であると思います。

「老人と海」ヘミングウェイ 著 サンチャゴの強さ

2E 小林 政善

サンチャゴは強い。精神的にも、肉体的にも。そんなサンチャゴの誰にも屈しない強さ。それが、「老人と海」を読み終えたときに僕の中に最も強く残った印象でした。

キューバの老漁夫であるサンチャゴは、ある日、わずかな餌で自分の舟よりも大きなカジキマグロを実に四日にも及ぶ死闘の末に捕獲します。しかし、帰途にサメの襲撃を受け、サンチャゴの抵抗も空しく、マグロはどんどん食いちぎられてゆく。大まかなあらすじだけを挙げてみても、この話の壮絶さは容易に見て取れます。そして実際に、この悲劇的なストーリーは、サンチャゴの強さと相まって、読者の心に激しい衝撃を与えます。一体このサンチャゴの強さの本質は何なのでしょう。

話の冒頭部分では、サンチャゴについてむしろ弱い印象を受けます。いつから続いているのかも分からない長い不漁。新聞紙の上で眠る貧しい生活。この部分では、サンチャゴはただの老いぼれた漁夫でしかありません。しかし、話も中程になるとどうでしょう。海に出たサンチャゴはことごとく闘争的で、自己の負った傷を

自ら無視して、敵と闘います。その姿は勇敢な戦士そのものです。右手は網で擦って傷だらけだし、左手は思うように動いてくれない。ただでさえ体力が落ちているのに、ろくな食べ物もない。そんな状況でも決して諦めずに真摯に闘い通すサンチャゴは、正に戦士といえるでしょう。

そんな戦士であるサンチャゴの強さとは、おそらく、意志の強さではないでしょうか。彼の行動や言動から、彼がかなりの弱肉強食主義であることが読み取れます。強い者が勝ち、生き残り、弱い者は肉となるという救いのない世界観。それが彼を強くしたのではないのでしょうか。そんな頑とした考え、強くならなければ生きていけないという考えが、彼に四日にも渡る死闘の末の勝利をもたらしたのではないのでしょうか。

サンチャゴの強さについて考えるとき、僕はいつも祖父を連想します。祖父は日本兵でした。トラックで戦地に物資を運んでいたそうです。サンチャゴからは、兵士のような、侍のような強さを感じます。そして、その強さの根本にあるのもやはり「意志」なのです。それに、サンチャゴの獲物に対する姿勢は、まるで長年のライバルと闘うかのようです。

僕らはよく、無気力だ、覇気がないなどと言われます。実際にそうだろうな、という自覚もあります。いや、僕らだけではないでしょう。長い不景気で、日本全体がまるで灰色のゼリーに包まれたかのような気だるさが、そこら中に見て取れます。しかしそんな時代だからこそ、サンチャゴのような意志の強さを、本当の強さを個人個人が持つことが必要なのではないのでしょうか。少なくとも僕は、この「老人と海」のサンチャゴのように、一本芯の通った人間になりたいと、そう思います。

しかし、もしサンチャゴ本人に彼の強さについて尋ねることができたならば、彼はこう言うでしょう。「そんなものは知らない。俺はただ、あいつを捕まえたかっただけなんだ」と。



『英霊の声～奈良県戦没者遺稿集～』 を読んで

2 E 田中 健太郎

戦後補償、南京虐殺論争、慰安婦問題……今日でも太平洋戦争の戦後処理問題が、尾を引きずっています。最近テレビでも取り上げられ、僕も戦争について考えようと思い、この本を手に入れました。

内容は、太平洋戦争の酷さを表す写真とその説明でした。それを眺めていくうちに、戦争に対して軽い気持ちでしかなかった自分が情けなくなりました。ページをめくるごとに伝わってくる戦争の悲惨な光景……今まで僕が知らなかった戦争の現実がそこには綴ってありました。そして、本の後半には戦死した人々の遺稿が載せられていて、様々な「声」がそこに刻まれていました。

「自分は不孝者で有りました。何卒御許し下さい。今度戦地に向かいますが、生きながらえて帰ると想われません——」

このような言葉が遺稿として手紙に残されていました。この文章を読んだとき、色々な想いが僕の中に生まれてくるのを感じました。「戦争で死地へ向かう恐怖はどんなものだったのだろうか？」

「愛する人々と遠く離れてしまう寂しさはどれほど辛かったか？」

「残された人々はどんな気持ちだったのか？」

戦争に対し、軽い気持ちでしか考えてなかった僕。その軽い気持ちが、この遺稿集を読んだ瞬間から少しずつ変わっていくような気がしました。人と人が本気で殺し合うという非情な光景は、とてもじゃないですが想像することが出来ません。しかし、こうして残された遺稿が戦争の現実を今の僕達に伝えてくれます。怒りがこみ上げてくるとか、とても悲しく思うとか、そんな単純ではないような、言葉では到底言い表せない複雑な感情が在るのは確かです。そして、再びページをめくっていくと、別の遺稿に目がとまりました。

「御両親様、次郎は立派に戦死致しました。喜ん

で下さい」

間違っている——僕は直感的にそう思いました。「喜んで下さい」の言葉から感じるのは、過去に行われた軍事教育への否定の気持ちでした。実はこの後にも遺稿は延々と続き、国を尊ぶ内容がひっきりなしに綴られていました。

「国の為に死ぬことが誇りである——」そんな考え方が当時では当たり前でした。しかし、今の僕達から考えると、この考え方は間違っているものだと感じられます。でもそれは、現代になってようやく分かった人類の教訓であり、過去ではそういう考えは反逆として扱われてしまったという事実があります。

今日でも、この世界の平和というものは不安定なものであり、いつ崩れてもおかしくありません。しかし現にこうして残された過去の戦争の反省を、僕達や戦争の知らない世代の人々が読み、二度と戦争を起こさせないという考えを身につけることが、今一番大切なことであると思います。この本を読み終えて、僕が至った結論です。

そして、僕達の世代が戦争という悲劇が二度と起こらないように努力する……それが、この遺稿集から学び取った大切な考えです。

僕達の世代はもちろん、戦争を知る人も少なくなりました。そうして消えていく戦争への意識は、誰にも止めることは出来ません。しかし、だからこそ遺稿集や体験談などの戦争の資料を積極的に読んだり見たりして戦争への意識を高めることが大切です。

一人でもこのような戦争を知らせてくれるものに会えるようにと、僕は思います。

「君の肩越しに拡がる世界をみつめてる」
水野麻里 著

自分らしく、まっすぐ生きよう

2I 野村 明日香

似ている……。はじめてこの本を読んだとき、少し、いやかなり驚いた。自分に自信がなくて、大切な人を失うことへの恐れから本音が言えない。相手にいわれるままに流されて、心の中へ不満を積もらせてしまう。頭の中では、平均点

の人生を歩みたいという願望が絶えず存在している。夏海の姿は、もどかしいと同時に、強く共感できるものだった。それは、私自身に対するもどかしさでもあったからだろう。十七歳の学生の私と、三十歳を目前にした、フリーライターの夏海。年齢や立場は異なるが、考え方や、人とぶつかることへの臆病さ、自分への自信のなさはそっくりである。いつの間にか私は、自分と夏海の姿を重ねていた。

そんな夏海を変えた一人の少年、瞬。素直で、意志をしっかりと持ち、堂々と生きている瞬に、夏海と私は惹かれていった。瞬は超人気アイドル。容姿も抜群で、色々なことに自信があるのだろうと思い、私もうらやましく感じた。もっと外見がかわいければ、スタイルがよければ、流行の服を着られれば、何もかもうまくいくに決まっている。全ては、自分のこの顔が、容姿が、環境が悪いのだ。私は、瞬のようになれたらとさえ思った。普段の生活の中でも「あの人になりたい。きっと何も苦労がないのだろうな。」と、羨望のまなざしで見ることがしょっちゅうある。それは当然のことだと思っていた。なりたくてもなれない、私はいつまでたっても納得のいかない「私」でしかないのだから、と投げやりな感情しか持てなかった。そうして夏海も、「もう若くない」という揺るぎない事実で、変わることを恐れ、避けていた。だが、瞬は違った。「アイドル村岡瞬じゃなくって、俺は俺でしかないのにね……。」そう言って、自分の存在を確かめるため、止まることなく進み続け、自分なりの答えを見つける。アイドルという枠、彼の言う「運命」の中、等身大の自分で、目一杯できる正直な生き方をしようとする瞬。私は、ここでもまた「こんな風になりたい。」と思った。さっきとは、また違った意味で。なりたい、というよりも、「なろう。きっと私だってなれるんだ。」という気持ちだ。何かのせいにするのは容易なことだし、言い訳にもなる。でも、それが弱い意志を作ってしまうのだ。自分という枠の中で生きるのは、不満や苛立ちも多くあるだろう。それと同時に、可能性を胸に抱きながら生きていけるのである。私にしかない、私のための未

知の可能性。そのことに気づいたとき、運命は、「粹」ではなく、自分らしさへと変わっていくのだ。

瞬と夏海はやがて、それぞれ「自分である自分」を見つけ、心と心で言葉を交わすようになる。結婚やゴールといったもののための関係ではなかった。ぶつかったり、悩んだりしながら、心の距離を縮めていった。それは、夏海が長年の恋人、恒平に対してできなかったことでもある。大切な人と想いをぶつけ合い、心の底から話し合うのは簡単なことではない。勇気もいる。しかし、偽りでない言葉を伝えて、初めて「心の距離」は縮むのである。そんな風に付き合っていける人と、男女関係なく、出会いたいと思う。何より、いま身近にいる友達、家族を大切にしていきたい。

この本のタイトルである、「君の肩越しに広がる世界をみつめてる」という言葉。瞬から夏海への、「自分の可能性をあきらめないで。」というメッセージが、私にも伝わってきた。瞬は、事故によって二十歳で人生を終わらせてしまう。熱く、前向きに生きた、二十年間。夏海に、そして私に、多くのことを残してくれた。限りある人生の中で、自分らしく生きることの大切さ。それによって築かれる、心と心のつながりの強さ。瞬、そして夏海、ありがとう。私は私として、まっすぐ生きることを忘れないから。

カレン・ヘス 著

『ビリー・ジョーの大地』 を読んで 2C 丸田 寛子

作家の曾野綾子さんがアフリカに行った時、砂漠のテントの中で貧しい生活をしている子供達について、「こんなに綺麗な星空を見上げる事が出来るこの子達の方が、私達よりずっと幸せなのかもしれない。」というような事を話されていたと聞いた事があります。「ビリー・ジョーの大地」を読んで、この話を思い出しました。

オクラホマ州のバンハンドル地方—乾燥し、土埃に見舞われ、雨が少なく十分な作物が穫れない、アメリカのど真ん中、大平原のまっただ

中—に住んでいるビリー・ジョーは、1934年から1935年に大変な経験をしました。その中から自分を見出し、成長するのですが、それをサラリとさりげなく表現してあるのがすごいと思いました。この本の中には、「感動」というほど大げさなものではなくても、心に響く「何か」がたくさんあります。

まず、母の死ですが、いつもは料理用の水を置いてある場所に父が灯油を置いてしまった為に、母が水と間違えて使い、灯油の入っていたバケツに炎が入り、母は外に飛び出して行きます。そして、ビリー・ジョーがその炎の入ったバケツを何とかしようと、外に放りなげると、飛び出したあと帰ってきた母にあたり、それが原因で母は苦しみながら死んでしまいます。事件がおこった時、母は赤ちゃんを身ごもっていて、赤ちゃんを産んですぐに死んでしまったのですが、赤ちゃんも生まれて間もなく死んでしまいます。家族を二人も失ってしまい、周りの人からは「あの子が火のついたバケツを投げたんだ。」と言われ、ビリー・ジョーは辛い日々を送ります。父が灯油のバケツを、普段水を置いていた場所に置いた事を、心底恨みながら彼女は家出します。でも、家出した自分を迎えに来てくれた父と色々な事を話しながら帰っているうちに、父のことを許すようになります。本音で話す事の難しさと大切さがよくわかりました。

次に、この本の中では、貧しい人が多く、普段からお互いに助け合って生きてゆく姿に感動しました。貧しい自分達が必要として買った物や作った物を、さらに貧しく、それを必要としている人達に分けてあげているのです。今の私達の生活の中では、あり余る物の中から僅かな物を寄付する事はありますが、必要な物まで人に与えることはあまりありません。今の日本では、遊びたい為に、人の物を強引に盗る人が多発しています。豊かさ故に心が貧しく、人を思いやる心が足りないのは悲しい事です。物質的に豊かなのと、貧しいのとでは、どちらが本当に幸せなのでしょう。

そして、フリーランド先生の言葉も心に残りました。ウサギが畑を荒らすという被害につい

て、「人間が地面をどんどん耕していったら、食べる物を失くしたウサギはどうすればいいのでしょうか。という言葉は現代でも通用すると思います。人間のエゴによって自然が破壊され、後に取り返しのつかない形でその報いを受けているのです。これは、自然を元の状態に戻すだけでは済まない、大変な問題だと思います。

最後に、ビリー・ジョーは、初めは何かを探

したくて家を出ただけけれど、素晴らしい物なんてどこにもない、家が一番いいということが分かります。そして、「辛い時」というのは、希望も気力もなくなった時であると言っています。

夢を失わず、希望を持ち、外に何かを期待するのではなく、幸せは自分で作り出せるように、これからよく考えて生きてゆきたいと思いました。

新刊 書棚から

ここに届く授業 河合隼雄・谷川俊太郎著 小学館

不登校体験者の詩人谷川俊太郎さんと、中学高校教師経験者の心理学者であり、現文化庁長官の河合隼雄さんの、「心に残る授業」風景です。間違った答えには可能性がいっぱいつまっていると河合さんはおっしゃっています。そんなふうを考えて下さる先生がもっといて下さったら、劣等生だった私も少しは救われたかもしれないと、とても残念です。最後のお二人の対談はとても示唆にとんでいきます。親子の会話が「なってない」などという件（くだり）では、まるで、わが家の会話の再現のようで、思わず笑ってしまいました。先生方よ。劣等生をばかにせず、より可能性を秘めた存在として救いの手をさしのべて下さい。

スラムダンクな友情論 斎藤 孝著 文春文庫

つくづく友情の育たない時代だ、などと嘆いていても仕方ありません。「残しておきたい日本語」や「読書力」で大活躍の斎藤先生が友情の大切さを伝えるために、マンガや映画をはじめ、十代必読の名著から“友情”を取り出し真の友情関係を学ばせてくれます。

カスピ海ヨーグルトの真実 家森幸男著 法研出版

最近よく耳にするカスピ海ヨーグルト。発酵乳製品が体どういいのか？長寿を支えるヨーグルトの力を調査に基づいて検証しています。そういえば、数日前どこかのテレビ番組で王滝村のおとしよりが元気なのは、塩を使わない発酵漬物「ずんき」を食べているからだとかいってました。

今やITに代わりバイオ分野が世の投資家の注目を浴びているそうです。中でもゲノムの解析や、田中さんが失敗から見つけたタンパク質の解析研究が人気の中心だといえます。乳酸菌、酵母菌など抗酸化作用の高い微生物活用の勉強は、生物化学や物質化学工学の学習の基礎ですからためになるかも。健康に関心のある方にもお勧めです。（と強引に理由付けして...）

清張さんと司馬さん 半藤一利著 日本放送出版協会

数々の名作を世に送り出し、昭和史そして戦後社会のあり方に立ち向かった二人の文豪の実像を、かつて編集者として共に歩んだ著者が描きます。強面の松本清張があんなに真面目で、心優しい人柄だなんて驚きです。あくなき探求心、卓越した洞察力・先見性などはもちろんですが、作品のヒント探しや、取材旅行における交わりなど、作家の素顔を彷彿させる事柄が満載され、とても興味深く読めました。「鳥瞰する」司馬歴史小説。地べたをはい回り刻々の変化を小説にする清張。昭和史の中に燦然と輝く二人の大作家を親しく接した著者ならではの知ることのできないエピソードなどを交えて分かりやすく、楽しく語ってくれます。私は昔から清張派です。あなたはどちら？いずれにしてもこんな事を書ける人（半藤さんのような）はだんだん少なくなります。まさに昭和は遠くなりかけり・・・でしょうか。話題性のあるうちに読んでおきたい一冊です。（本書は「NHK人間講座」のテキストに加筆し、まとめたもの）

特許について 特許を学んで、特許を取ろう！

みなさんは子どもの頃、早口言葉の訓練で「東京特許許可局の局員」と口ずさんだことはありませんか。特許は許可局ではなく特許庁が特許を付与する権限をもっています。許可局などというのは、ことば遊びを面白くするためにくっつけたものでしょう。特許制度の本質は、情報・技術のコピーの禁止をして発明者・考案者の保護をすることです。さまざまなアイデアのうち、特に技術に関するアイデアである発明を模倣から保護するためのものです。発明者は特許を取得することによって、他人の違法な模倣を禁止し、自分の発明を守ることができます。更に特許の公開により皆に知られることができます。普段私たちは気軽に本をコピーしたり、コンピュータプログラムをダウン・ロードしたりしていますが、法に触れる場合もあるということを知っておく必要があります。



専攻科では、そんな特許や、ネット社会になってますます重要になってきた知的所有権に関して、後期授業の「特別講義」で「開発研究における工業所有権について」－特許電子図書館の有効利用法－とするテーマで取り組んでいます。本科生、わけても低学年生には、あまり関心の無いことかもしれませんが、技術者を指すものとしては、知らないではすまされない大切な事柄です。

このたび 特許実験校として指定されたのを機会に、特許関連本を購入し、特許に関する関心を深めてもらうことになりました。図書館カウンター前の、新着本コーナーに展示（2月末まで）しています。また、発明協会から寄贈を受けたの工業所有権標準テキスト（特許編）なども同時に展示しています。是非手に取って見て下さい。

もしかして、あなたのアイデアは“特許もの”かもしれませんよ。

編集後記

暖冬、暖冬と喜んでいたけれど、厳しい寒さが続きます。年末の新聞で、日本で一番信頼のおけるのは、一に天気予報、二に新聞 三が医師で最後が政治家と（先生は5番目でした）報じられたのを見かけた人がいるでしょう。年明けから続くこの寒さで気象庁の信頼度は一気に下落したのではないのでしょうか。

とはいいつつも、間もなく立春です。名のみといえども、やはり心が躍ります。今号は読書感想文コンクール優秀作品と、3月に定年を迎えられる電気工学科高橋先生の特別寄稿文“本づくりの苦心談”をご紹介します。先生らしさの溢れた楽しくてためになる一文です。是非お読み下さい。

お忙しい中、紙面作りにご協力下さった皆様ありがとうございました。

(図書館委員会)